



空き家再生の事例 石垣商店街 「塩や、」

NPO法人頬娃おこそ会

諦めていた商店街に期待感をもたらす
地域の交流拠点として、誕生した1号物件「塩や、」

石 垣 商 店 街



も の が た り

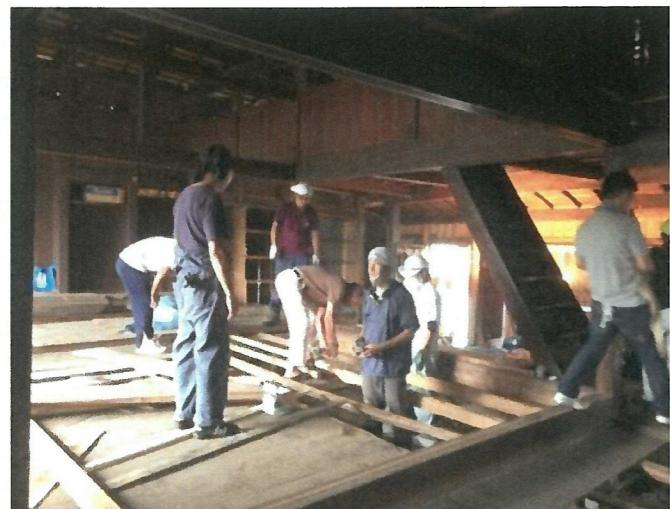


南九州市頬娃町石垣商店街。

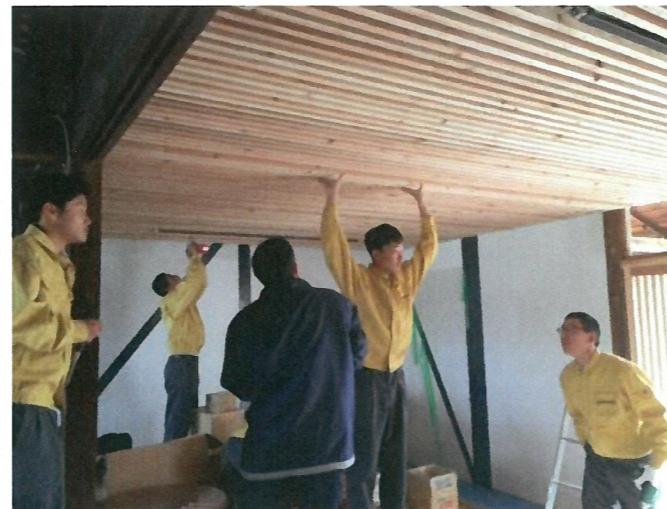
海運が盛んだった時代に栄えた古き良き港町。最盛期には100店を超える店舗が軒を連ねたが、今では7~8軒にまで減少した。そんな寂れた商店街の中心にあったのが、築100年の古民家「塩や、」だった。元、塩の販売店だったことからこう名付けられた。

NPOを通じた再生活動が始まったのは2014年のことだった。頬娃町で観光を通じたまちづくり活動が活発になる中で、観光の流れを商店街に…と、散策マップづくりや、まち歩きガイドを始めたことがきっかけだ。もともとはこの塩や、の真向かいにあった築140年の古民家の保存活動に動いたが、家主理解取り付けに苦労し解体されるという挫折も味わった。その話を聞いた塩や、の家主が、無償提供を申し出てくれた。

もっとも、空き家再生を初めて経験する私たちにとって、その後の道のりは、平坦ではなかった。NPOのメンバー、地域住民、行政、大学、高校など幅広い支援を得ながら、約2年を掛けたゆっくりとした改修作業を経て、地域の交流拠点として再生されるに至った。今ではさまざまなイベントや会合が開催され、移住者や創業を生み出す起点となった。「塩や、」の名前には接続詞の「や」と読点の「、」を付し、次に続くようにとの想いを込めたが、頬娃おこそ会の空き家再生は、その後9軒に及ぶ。塩や、は諦めていた商店街に期待感をもたらす、そんな存在であった。



改修作業は大学、高校、地域住民が協働し、DIYを交え行われた。
左：大学とのDIY改修 右：地元頬娃高校による電気配線作業



完成後はさまざまなイベントが開催されるようになり、地域にぎわいをもたらす拠点となった。左：古民家マルシェ 右：朝ごはん会

